

動物に由来する薬剤耐性菌

浅井 鉄夫 先生

岐阜大学 大学院連合獣医学研究科
獣医学専攻 応用獣医学講座

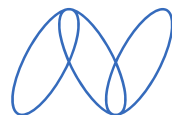
日時：平成 28 年 10 月 13 日（木） 15:00 - 16:30

場所：日本生物科学研究所 管理棟 会議室 2・3

【要旨】

抗菌性物質製剤（抗菌剤）は動物の健康や福祉を維持するため、法的規制の下で半世紀にわたり使用されてきた。しかし、抗菌剤が使用されることで、薬剤耐性菌が出現・増加し、薬剤耐性菌による感染症は、医療分野と同様、獣医療においても治療効果の低下につながる深刻な問題となっている。また、家畜に分布する耐性菌が畜産食品を介して人へ伝播する可能性という公衆衛生上の問題に関して、リスク分析に基づく薬剤耐性菌対策が食品安全委員会、農林水産省及び厚生労働省により取り組まれている。1969年に英国議会に提出された“スワンレポート”が契機となって、家畜に使用する抗菌性物質と薬剤耐性菌の関係に、世界各国が注目することとなった。その後、様々な国際会議で議論されてきたが、2003年12月にジュネーブで開催された「人以外への抗菌性物質の使用と薬剤耐性に関するFAO/OIE/WHO合同専門家会議」でリスク評価が行われ、食用動物における抗菌性物質の使用が人の健康に影響すると結論づけられた。最近では、2015年5月の世界保健総会で、薬剤耐性に関するグローバル・アクション・プランが採択され、わが国においても2016年に

薬剤耐性に関する国家行動計画が策定された。これまで、医療現場で問題になる薬剤耐性菌について、畜産分野での抗菌剤の使用が規制されてきた。バンコマイシン耐性腸球菌（VRE）問題では、バンコマイシンと類似した構造を持つアボパルシンが家畜に使用されることがVREの分布に関与することが指摘され、1990年度の後半に多くの国で家畜へのアボパルシンの使用が禁止された。デンマークでは、アボパルシンの使用中止により家畜由来腸球菌におけるVREの占める割合が急激に減少した。一方で、2005年9月に米国では、カンピロバクターにおけるフルオロキノロン耐性の増加、カンピロバクター食中毒の主要な原因食材が鶏肉であることなどのリスク評価結果に基づき、家禽用フルオロキノロン剤の承認が取り消された。しかし、鶏由来カンピロバクターの薬剤感受性調査では、承認取り消し後のフルオロキノロン耐性に変化は認められない。このように、抗菌性物質の使用と耐性菌の分布との関係は単純なものではない。今後、各国の取り組みや結果を十分に分析して、薬剤耐性菌の制御方法を構築することが必要となっている。



主催

一般財団法人 日本生物科学研究所

N I B S <http://nibs.lin.gr.jp/>